

平安初期の国分寺制

中 井 真 孝

はじめに

国分寺の研究は、戦前において角田文衛氏の編する『国分寺の研究』で、文献・考古両分野の研究成果が集成され、その基礎が築かれ、戦後は井上薫氏の『奈良朝仏教史の研究』および石田茂作氏の『東大寺と国分寺』において、文献・考古各分野の研究が一層深められた。ことに諸国の国分寺遺跡の発掘が陸続と実施され、考古学上の知見は年ごとに蓄積されている^①。そして、井上薫氏の提起された、いわゆる「旧寺転用」の問題が八賀晋氏の伽藍配置の新旧型論で明らかにされつつあるように、文献・考古両分野の総合的研究も著しい進展が見られる。

しかし、従来の国分寺研究は、その対象を、建立勅をめぐる諸問題、成立経過や時代背景の究明など、奈良時代の国分寺に置く研究が盛んで、平安時代の国分寺に関する研究は量的にまったく少ない。こうした研究動向は、魚澄惣五郎氏^②の古典的な論文に泥み、九世紀以降の国分寺は退廃の一途をたどり、歴史的使命を失なったという先入観から脱しきれなかったことに由ろう。

平安前期の国分寺史料は前代に劣らぬほど豊富である。にもかかわらず、研究が等閑にされてきたのは、この時期

の国分寺がすでに形骸化した存在と見て、積極的に評価しなかったからである。だが、平安初期の律令国家は国分寺制の維持につとめ、頻繁に法会を営ませていた。国分寺の形骸化はまだ起っていないが、衰微への兆しと原因を内に抱えた、国分寺制の消長を劃する重要な時期であったと考えられる。

ところで貧しい研究現況を打破すべく、平安時代の国分寺を正面に据えて、衰退の過程を精細に追求し、原因を多岐多様に論じたのは堀池春峰氏^⑥であり、八世紀中葉の承和年間の国分寺政策を取り上げ、その歴史的意義を明らかにしたのは吉岡康暢氏^⑦である。両氏の労作は、平安時代なканずく前期の国分寺に関する諸問題を網羅し、とりわけ国分寺罹災と代替寺院、承和年間の国分寺新設と社会情勢については創見に富み、反駁の余地なき完璧な所論である。しかしながら、両氏が深化させなかった問題も若干はある。たとえば、国分寺制の歴史的展開のなかでの平安初期の位置づけはなお各方面より論議しつくされるべき課題であろう。それに国分寺維持のために律令国家が講じた諸政策の分析も必要であり、また国分寺衰退の要因も視座をかえて考察しなおすことも意味あるものと思われる。

そこで本稿において、堀池・吉岡氏の研究を参照しつつ、平安初期の国分寺制の展開を論じ、そこに内在する衰微の兆しや原因を究明したいのである。この際、私のとった考え方を簡潔に述べておくと、そもそも国分寺に限らず、すべて寺院は、法制的に少くとも(一)堂塔伽藍がそなわり、(二)そこに僧尼が居住し、(三)かれらによって法会等の宗教行為が営まれる、の三要素から成り、その一を欠けば寺院たりえないということである。したがって、ここで国分寺制の消長を問題にする場合、〈伽藍〉〈僧尼〉〈法会〉の三面からの観察が必要となろう。すなわち、国司・講師による国分寺等の修造体制、国分寺焼亡と代替寺院、国分寺その他で修される攘災招福の護国法要、国分寺僧尼の資質低下などを論究したく思う。

一 国分寺・定額寺の修造体制

国分寺がほぼ全国的に整備をみるに至ったのは、道鏡政権が成立した時期だと推測されており、これをさかいに金堂・塔などの建立を促がす記事は正史から消える。ところが天平神護二年（七六六）八月十八日の太政官符^⑤には早くも「国分寺先經造畢塔金堂等、或已朽損、將_レ致_二傾落_一、如_レ是等類、宜_下以_二造寺料稻_一且加_二修理_上之」という一項を加え、神護景雲元年（七六七）十一月十二日の勅^⑥で「諸国々分寺塔及金堂、或既朽損、由_レ是天平神護二年各仰_二所由_一、以_二造寺料稻_一隨即令_レ修、而諸国緩怠、曾未_二修造_一、（中略）宜_下早隨_レ壞修理不_レ得_二更怠_一」と重ねて命じているのが注意をひく。宝龜元年（七七〇）までは国分寺知識物の献上記事が『続日本紀』に散見するから、いくつかの国々はなお造立中であつたと想像されるが、大勢は、天平十三年（七四二）国分寺建立勅の発布以来わずか四半世紀をそこで、堂塔の「修理」「修造」段階に入ったのである。すなわち、これからは時宜にかなり適切な管理運営が国分寺制展開にとって重要な課題となつた。

この管理運営でまず問われるべきは、堂塔伽藍の維持とその責任体制のありようである。国分寺造立の責任者が国司および国師であつたことはそれを督励する詔勅に照して明らかだが、修造の責任も同じ体制であつたと考えられる。そこで前引した天平神護二年官符・神護景雲元年勅より以降、律令国家は国分寺修造に関して国司や国師にいかなる措置を講ぜしめたのかを検討したい。

天平神護二年九月、「宜_下諸国具錄_二歲中修理官舍_一之數、付_二朝集使_一、毎年奏聞、国分二寺亦宜_レ准_レ之^⑦」と、官舎修理に併せて国分寺修造の実績を国司が毎年朝廷へ報告することを義務づけた。これがどれほど厳格に遵守されたかは確かでないが、光仁朝から平城朝までの四〇年間、国分寺修造を督励する記録はほとんど史乘に現われないのである。だいたい伽藍の保守は、堂塔が全くの倒壊や焼失でもしないかぎり小規模な修繕で済み、国分寺稻を公出奉し

て得たる毎年の利稲だけで経済的には十分ゆとりがあったと思われるし、「事縁^レ例行」^⑧「尋常碎事」のたぐいは国史に書きとどめないのが通例であるから、光仁朝ないし平城朝では国分寺の修造が順調に行なわれていたと見ることは可能かも知れない。しかし、国分寺稲は国衙財政の主要を占める正税・公廩の各稻と合せて公出挙されるのであって、国分寺が絶え間なく修理されるには、何よりも国衙財政が健全、かつ国分寺稲が適正に運用されていたことを前提条件とする。いま問題の時期に右の条件が満されていたとは到底考えがたく、なかならず国分寺稲の運用は必ずしも適正でなかった。その一例に宝龜四年の丹後国の場合を取り上げると、同国は「前年頻有^三亢陽、田畠荒廢、民業既衰、貧窮無^レ比、復頃年之間、疫氣繁蕩、死亡伯姓其数夥多」なる状態で、論定数を出挙すること困難なため、「国分二寺料四万束」の出挙を二、三年間中止したいと官裁をこうて聴許されたが、それは「今檢^三造寺料稻、見在数卅四万六千束、而前国司等意不^レ存^三造寺、徒積^三倉粟、稍経^三数年、」という現況にもとづき、「減^三省件員、留^三停出挙、用^三見在稻、稍為^三勤造、随^レ尽更挙」せんとしたのである。^⑨丹後国だけの特殊例にはかならないと言えばそれまでだが、「意不^レ存^三造寺」なる国司が他の国々にもいたことは想像に難くないであろう。かかるなかで『日本後紀』弘仁二年（八一二）九月己亥条の、

令^三諸国依^レ旧出^三挙修理国分寺料、

は看過できない。「修理国分寺料」（国分寺稲）の出挙が停止されていた期間は定かでないが、嵯峨朝初年の政策は平城朝で断行された諸制度改変の復旧が多かった事実^⑩に準拠して考えれば、少くとも大同年間のことと推測される。国分寺稲の公出挙停止は、修造に用いる財源の喪失につながり、たとえこのような短期間であったとしても、国司の意向とは関りなく修造が順調に運ばなくなつて、漸次荒廢をまねく起因となる、国分寺制にとって一面では深刻な事態に陥つたのである。それが旧に復した弘仁二年の翌々年の弘仁四年九月、「畿内七道諸国官舎・正倉・器仗・池堰・国分寺・神社等類、随^レ破修理、各立^三条例、至^レ有^三關意、拘以^三解由」する規定だが、現在は破損状況を「不与

解由状及交替帳等」に載せるばかりで、「旧人者縁無其勢不堪修造、新司者称非己怠棄而不顧、稍経年月、弥致大損」す宿弊を解消すべく、今後は「交替之日、所有破損、宜令後任早加修造、其料作差割留前司主典已上公廩充之、如無公廩者徵用私物、仍待修理訖乃許解由」と、再び国分寺修造に言い及ぶ太政官符が出た。官舎・正倉などと並んで国分寺をも修理する義務を前後任の両国司に負わせたのは、一つにはこれまで国分寺修造に熱意を示さなかった光仁・桓武・平城朝の消極的な対国分寺政策のしからしめる結果として国分寺荒廃がようやく顕著になりつつあることを物語っている。

それはともかく、右の太政官符によると、国分寺は、まさに修造すべき「破損雑物」の一端にすぎない。国司は国分寺修造にだけ専当するものではなかった。とすれば、実質的には同寺を居処としたであろう国師が専当者であつたと考えざるを得ないのである。国師は、管内仏教界の領導を職掌とし、經典講説のほか、国司と共に部内の国分寺をふくむ諸寺および僧尼の統轄にたずさわっていたが、延暦十四年（七九五）八月、講師と改称、もっぱら講説に従事し、宗教行政は一切国司の手にゆだねられた。ただ二年後の延暦十六年八月の勅に、講師たるゆえんは「教導緇徒」にあるとし、「除造寺事之外、寺内庶務、及糾正僧尼」を掌らせ、さらに延暦十八年五月、国分寺僧を沙汰するに至り、権限は増幅したものの、なお諸寺「造寺事」は除外されていた。けれども「当国司等検査伽藍、諸寺綱維趣走府庁」なる奇態を生じたので、延暦二十四年十二月、「部内諸寺者、講師国司相共檢校、不得独恣」と改められ、以前の国師に等しい職掌を得たのである。この間の沿革を天長二年（八二五）五月三日の太政官符には、

去延暦十三年已往、毎国置大小国師、令講安居經、兼檢部内諸寺、十四年改国師称講師、毎国置一人、住持正法、不預他事、（中略）廿四年更令講師檢校部内諸寺、

と簡潔に述べている。毎国講師が檢校する「部内諸寺」には当然国分寺をも含んでいた。というのは、『日本後紀』弘仁三年三月戊寅（廿日）勅に、

大同之初、令_レ畿内講師_ニ專預_ニ講説_ハ、令_レ演_ニ真諦_ハ、其諸寺雜事并補_ニ三綱_等、暫預_ニ僧綱_ハ、但国分寺者、国司講師相共檢校者、自今以後、部内諸寺、宜_レ令_ニ講師_ニ永加_ニ檢校_ハ、其国分二寺、国司亦相共檢、其造寺用度者、講師別亦勘録、毎_レ年申_ニ送於僧綱_ハ、遷替之日、令_ニ依_ニ旧例_ニ責_ニ其解由_ハ、諸国亦宜_レ准_レ之、

とあつて、大同年間に畿内国講師について「諸寺雜事并補_ニ三綱_等」の権限はしばらく僧綱に預けたが、ただ国分寺は国司と共に檢校したというからである。そしてここにいる「檢校」とは、前引の延暦十六年八月勅や同二十四年十二月官符にてらすと、「造寺事」「檢_ニ掌伽藍_ニ」のこと、国分寺に則していえば修造のことがその中核をなしていたと考えられる。弘仁三年三月勅の「其国分二寺」以下の箇所は同日付の左記太政官符がやや詳しい。

太政官符

応_レ令_ニ諸国講師_ニ檢_ニ校_ニ国分二寺_ニ事

右檢_ニ案内_ハ、太政官去天平十六年十月十七日勅、国師親臨檢校務令_ニ早成_ハ、用_ニ粮造_ニ物子細勘録_ハ以申_ニ綱所_ハ、一切諸寺亦復如_レ之者、自_レ茲以降遵行既久、至_ニ于延暦十四年_ハ、改_ニ国師_ニ称_ニ講師_ハ、專任_ニ講説_ハ、不_レ預_ニ他事_ハ、堂宇頽壞不_レ存_ニ修葺_ハ、尊像損汙無_レ情_ニ改饒_ハ、熟論_ニ其理_ニ事不_レ容_レ然、今被_ニ大納言正三位藤原朝臣園人宣_ニ偈_ハ、奉_ニ勅_ハ、自今以後宜_ニ与_ニ国司_ニ共令_ニ依_ニ件檢校_ハ、其申_ニ送用度_ニ并勘_ニ解由_ハ、一依_ニ旧例_ハ、

弘仁三年三月廿日

この太政官符は平安初期の国分寺制を論ずるに黙過できぬ事実をわれわれに示している。それは第一に、延暦十四年、国師を講師と改め、もっぱら講説に任じ、他事に預からせなかったのは、年分度者課試制など教学振興策の一環として、それなりの評価を与えうるが、しかし皮肉にも国分寺にとっては不幸なできごとであつた。「堂宇頽壞不_レ存_ニ修葺_ハ、尊像損汙無_レ情_ニ改饒_ハ」というありさまに墮したのは、ひとえに講師が自己の止住する国分寺でさえ「檢校」する職権を奪われたからである。国分寺の荒廢は、かかる法的措置とは何ら関りなく、管理運営の責任を担う国

師（講師）もしくは国司の、伽藍修造に対する心構えの程度に由来する問題であるかも知れないが、当時の律令国家がとった財政緊縮と仏教界肅清の下、国分寺維持に消極的であったことが起因して、徐々に進行していた事実を見逃してはならないと思う。第二にそれが嵯峨朝に入るや一転して、国分寺修造のことがクローズ・アップされ、ここに弘仁期以降の対国分寺政策を究明する緒を見い出すのである。

こうして講師に対する弘仁三年三月官符、国司に対する弘仁四年九月官符あいまって、国分寺修造は諸国の僧俗両官に課せられた。これは前代に比べて国分寺重視のあらわれだと評価できよう。ところが、国司・講師の関知する修造寺院は国分寺だけにとどまらなかった。これより先、延暦・大同期においては、定額寺（諸寺）の田畝等を檀越が惣摂し、あるいは王臣家が横領することなどを禁じ、寺院経済の敝正化をうながしている。弘仁十三年三月廿六日の太政官符に、現今の定額寺が「多有_二蕪穢_一、或堂舎破損、尊容露曝、或資財已失、伽藍為_二墟_一」のような荒廃いちじるしきは、もとより三綱・檀越が修繕に心ないためであるが、「諸寺雑務」を兼知し検校すべき講師の怠慢も一因だから、以後は講師が定額寺の「一事已上相共預知、修理莊嚴」せよといい、はじめて定額寺修造の責任の一半を講師に課したのである。この後、天長二年五月、諸国言上の不与解由状に「多載_二部内定額寺資財堂舎無実破損等_一」るだけで、有司がそれを勘案しようにも資財帳が手元になくて真偽を弁別できないという勘解由使の起請を得て、延暦十七年以来停止してきた定額寺資財帳の進官を復活、六年一進（貞観十年に四年一進）としたのも、国司遷替のさい定額寺修造の実績を中央政府が把握するためであった。そして承和五年（八三〇）九月、勅して「令_レ修理天下定額寺堂舎并仏像經論及神祇諸社_二」め、さらに承和八年五月、次のような勅を發した。^③

如_レ聞、諸国定額寺堂舎破壞、仏像曝露、三綱檀越無_レ心修理、頃年水旱不_レ調、疫癘間發、靜言_二其由_一、恐縁_二彼咎_一、宜_レ重_二下_一知五畿内七道諸国、修_二理莊嚴_一定額寺堂舎并仏像經論、今須_二每_一寺立_二下_一可_二修理_一之程、附_二朝集使_一言上、習_レ常不_レ革、並_レ処_二重料_一、

また嘉祥二年（八四九）閏十二月、先勅とはば同じ文言をくりかえし、修理に關しては「其料充_レ寺家田園地子_一、若或寺元来無_二田園地子_一、具勘_二錄支度帳_一、早速言上、隨即裁下、国司講師不_レ加_二檢校_一、猶致_二破壞_一、及三綱檀越習_レ常不_レ革、必科_二違勅罪_一、曾不_二寬怒_一」と、財源や責任の所在を明示して嚴重に命じたのである。

以上のごとく弘仁から嘉祥にかけて、講師・国司をして定額寺の堂舎仏像を修理莊嚴せしめたこと、それが国分寺修造の督励と時期的に相並んでいる点は注目される。ただ、ここで国分寺および定額寺の各修造を講師・国司に課したといつても、国分寺と定額寺とは、その責務の内容は同質であつたのだろうか。いったい国分寺は、「先皇御願^⑧」を修する紛れもなき官寺にして、管理運営は国務の一環として行なわれるべきであるから、したがって修造が仏教行政をつかさどる僧俗両官の職務たることはけだし当然であつた。しかし一方の定額寺（諸寺）は、がんらい経営に當るべき本願主の檀越を有し、よつて修造はこの檀越ないし三綱の責任でなすべきこととがらに属したから、講師（国師）・国司が檀越の不法を糾すために財物田園等の管理に關与しても、修造にたずさわることはなかつたのである。

そこでこうした国分寺と定額寺の伽藍維持体制の基本的な違いを考えると、定額寺の修造に国司・講師をかわわらせ、中央政府が修理状況の把握につとめたことは——実態として修造の義務を負う檀越・三綱に対する監督に過ぎなかつたとしても——、律令国家が定額寺の経営の一部を肩代りすることを意味する。これは何よりも律令国家の地方寺院に対する認識の根本的な転換といわざるをえず、国家自身が定額寺を国分寺に次ぐ存在と認識したからこそ、堂塔伽藍の荒廢を座視するにしのびなかつたものと思われる。そして、承和八年五月勅・嘉祥二年閏十二月官符に明言するごとく、「水旱不調、疫癘間発」の咎を免れんがために下知したのは、まことに示唆的である。

二 国分寺焼亡と代替寺院

さて周知のとおり平安初期には国分寺焼亡といわゆる代替寺院のことが史料に散見する。すでにこれについては先

学の研究に詳しく、いまさら加うべき知見もないが、前節との関連で私なりに整理しておきたい。

まずは近江国分寺である。『日本紀略』弘仁十一年十一月庚申条に、

近江国言、国分僧寺、延暦四年火災焼尽、伏望以_レ定額国昌寺_二就為_二国分金光明寺_一、但勅本願釈迦丈六更_レ造、又_レ修_二理七重塔一基_一云々、許_レ之、

と見える。近江国分僧寺（金光明寺）が三十五年間も再建不能のまま国昌寺をもってこれに替えたことについて、「律令国家経済にもはや国分寺組織を維持する力がなくなつたことを示している」とか、「律令体制の矛盾が露呈し、動搖をきたしていたこの時期に、律令政府の経済力をもって国分寺を再建することは不可能となり、また国分寺の機能も早くから衰退していた。それゆゑ数十年の間、国分寺が破壊したまま放置されていたのである」とかの意見は、結論的には従わざるをえない。だがしかし、なおプロセスの若干を問題にしてよからう。

日本天台宗の開祖・最澄が宝龜十一年十一月、近江国分寺僧最寂の死闘の替りとして得度し、延暦四年四月、受戒のあと「国分寺僧帳」に編付されたこと、来迎寺藏の国府牒・度牒・戒牒に明らかな事実であり、この延暦四年（国分僧寺炎上と同年）七月、比叡山に登り、以後ながらく山林修行の生活を送つたとしても、かれの「本事」（所属寺院）はなお近江国分寺であつたと考えられる。ところが、『頭戒論縁起』所引の延暦二十四年九月十六日付「賜_二向_レ唐求_二法最澄_一伝法公驗一首」なる治部省公驗や、同二十五年正月五日付「加_二年分度者_二定_二十二人_一僧統表一首」なる少僧都勝眞等上表文に「国昌寺僧最澄」とあつて、最澄は国昌寺に属していたと見られる。いっぽう光定の『伝述一心戒文』では、最澄が入唐求法を決意する延暦二十一、二年ごろの叙述部分に「近江国金光明寺僧最澄」とある。こういった矛盾を解く鍵は次のように考えることであろう。すなわち延暦四年罹災の後、国分寺僧は国昌寺へ移され、弘仁十一年よりも以前すでに国昌寺は国分寺の実質的な機能を果していたのではなからうか。この国昌寺はすでに天平字五年（七六一）保良宮の近傍に存した明徴があり、国分寺に代りうる条件をそなえた定額寺であつたと思う。

それでは国分寺の代替条件とは何か。私は美濃・伯耆国の例から推測したい。仁和三年（八八七）六月、焼亡した美濃国分寺の代りに席田郡定額尼寺（寺名不詳）をあてたのは、この寺は尼寺ながら「令修御願」にふさわしい「殿堂宏麗」な伽藍であったからである。天曆二年（九四八）十二月、伯耆国分尼寺（法華寺）が類焼、その代替に道興寺をもってした経緯は、

国司須早造^{（寇カ）}其替、而去年異損之上、賊□相荐、亡弊之民不堪早造、爰件道興寺在管久米郡、去府十許町、

仏殿広大、雑舎数多、修御願尤有其便、望請官裁、因准諸国例、以件道興寺、被裁給法華寺之替、令修御願、将省吏民□□、

ということであった。^④この道興寺もまた先の美濃の場合と同じく御願を修するに十分な規模の堂舎をもち、しかのみならず国府の近くに位置していたのである。ちなみに美濃の定額尼寺のあった席田郡は、国府所在郡ではないが、それでも国府の東北約十五キロ、揖斐川左岸に位置する。わずか二例で論ずるのは危かしいが、国分寺の代替には、国府から近距離にあつて、御願を修するにふさわしい壮麗な堂宇を有する寺院が選ばれたと考えられる。^⑤近江の場合、国昌寺がこれらの条件をそなえた最適の寺院であつたから、国分寺炎上の後、毎年恒例の仏事（「御願」）を欠かさず勤修せしめんがため、再建成るまでとりあえず国分寺僧を移住させたのであろう。したがつて国分寺の代替といつても、それはほんらい再建までの便宜的な措置であつたとみなされる。天曆二年の伯耆国分尼寺でさえ「国司須早造其替」、而去年異損之上、賊□相荐、亡弊之民不堪早造、^⑥というのは単なる修辭にすぎないかも知れないが、国分寺は罹災後早急に国衙財政をもつて再建するのが原則であつたことを示唆している。

近江国は、国分僧寺が延暦四年に罹災した後、暫定的に国昌寺に国分寺の機能を代行させ、その一方で国分僧寺の再建を計画したものと考えられる。しかしながら三十五年後の弘仁十一年になつても再建成らず、ついに正式に国昌寺を国分僧寺とした。この間、国分僧寺再建が不能であつた事由を求めるとすれば、それは前述したように延暦・大

同年間における律令国家の財政緊縮と国分寺政策の消極性といった一般情況に加えて、近江国の特殊事情が考究されねばならない。では近江国において国分僧寺を妨げた要因は何か。第一に梵釈寺の造営がある。梵釈寺は、当初の名を四天王寺ともいい、長岡京・平安京遷都の強行に際し、桓武天皇が先例にならって四天王に加護を求め、旧勢力をそぐ祈願をこめて、追慕する天智天皇の故地に建立した官寺で、延暦五年に造営を開始している。住僧（清行禪師・三綱）、修理料（水田・封戸）、所願などを定めた。延暦十四年九月には伽藍造営がほぼ完成したと思われる。梵釈寺造営を専断する造寺司が設置された形跡はなく、また当時の中央財政は相つゞ宮都の造作で逼迫していたから、梵釈寺の建造は近江の国司が勾当し、費用は国衙財政でまかになったものと思われる。そうなれば国分僧寺の再建など到底ゆとりなかったはずである。第二に、近江国は京師に近いことから、雇役に差発される機会が多く、おのずと国内力役の負担能力は低下し、ために国分僧寺再建のごときは、一時の代替でさしたる支障のないかぎり、不急不要の造作とみなされ、ついつい後廻しとなって歳月を重ねたのではないか。以上の推論がゆるされるなら、国分寺罹災とその代替寺院は、当面は近江国だけの特例というべく、国分寺制の衰退現象そのものではないのである。

次の国分寺火災記事は、『類聚国史』卷一七三（火）、弘仁十年二月丁卯条に「相摸国金光明寺灾」、同年八月甲戌条に「遠江・相摸・飛驒三国々分寺灾」と相つゞが、これら国分寺の被災の程度は不明である。承和二年に武蔵国分寺の七層塔が神火のために焼けたことと併せて、東国における神火問題の一環として論すべきであっても、今はただ代替寺院に言及しない点を留意したい。すなわち遠江・相摸・飛驒の各国分寺の火災は、代替寺院を措定するに及ばない程度の被害であったか、もしくは焼亡して一時的に代替寺院を設けたとしても再建成ったため代替寺院は史乘に名を留めなかったかのいずれかで、私は前者の場合を想定しておく。

ところで次掲の二史料は先ほどより所論の国分寺罹災と代替寺院の問題に一つの指標を与えるであろう。

相摸国言、国分寺金色薬師丈六像一軀、挾侍菩薩像二軀、元慶三年九月廿九日遭地震、皆悉摧破、其後失火烧損、

望請改造、以修御願、又依太政官去貞觀十五年七月廿八日符、以漢河寺為國分尼寺、而同日地震、堂舎頽壞、請仍旧以本尼寺為國分尼寺、詔並許之（『三代実録』元慶五年十月三日条）

伊豆国司言、国分法華寺承和三年失火焼亡、其後以定額寺為法華寺、請將新建、其料可用修理国分并通三宝布施料、聽之（同右元慶八年四月廿一日条）

伊豆国分尼寺は承和三年に失火で焼亡、その後定額寺（寺名不詳）をもって代替してきたが、元慶八年（八八四）に「新建」（再建の意）を願ひ出て許された。回祿以来じつに五十有余年のことである。相模国分尼寺は貞觀十五年（八七三）漢河寺をその代替としたが、当の漢河寺が元慶三年九月の地震で頽壞したので、翌々年に旧の法華寺を国分尼寺に復したという。もとの国分尼寺が何時いかなる災害に罹ったのかは不明である。ともあれ伊豆・相模の各国分尼寺は、罹災のために近江国分寺と同様に代替寺院を指定した。これが当初から暫定的にか恒久的にかは断言できない。けれども結局は、再建を図り、または旧寺に復したことをもって、代替の役割は一時的であつたと考えられる。さらにより重要なのは、九世紀末葉の元慶年間に国分尼寺の再興を企図した点である。国分尼寺は、一般に僧寺と比べて規模が小さく、再造は容易であつたかも知れないが、元慶三年に全焼した紀伊国分僧寺もまたその後再建されていることと併せて、この時期の国分寺再興の施策は大いに評価されてよからう。

元慶八年八月に勅して尾張国愛智郡の定額願興寺を国分金光明寺となさしめたのは、もとの国分金光明寺の災火焼損によるものだが、この国分寺代替が一時的か、はたまた恒久的か、残念ながら確証はない。しかし、仁和三年の美濃国分僧寺、天曆二年の伯耆国分尼寺の代替はそれぞれ恒久的な措置、すなわち旧国分寺の再建は図られなかったと考えられる。

以上、検討をした国分寺罹災による代替寺院は、近江国分寺を例外とすれば、再建までの便宜的な一時の措置であつて、旧国分寺を再興せずに代替を恒久化しだすのは、九世紀末葉に属する時代からである。したがって、「国分

寺が何等かの事情の下に亡失した際には、常に他の定額寺を仮に国分寺とせられた例は極めて多い。殊に平安朝中期以後これが多いのであるから、国分寺凋落の時期・傾向を有力に物語ってゐるものと言ひ得よう^⑤。という論説には同調できない。暫定・恒久を問わず、国分寺代替のことは、律令諸制度の弛緩と国衙財政の窮乏という情況下でとつた国分寺制維持のための現実的努力のあらわれであつたと見なければ、歴史的評価を誤るのではなからうか。

さてここで問題となるのは和泉・加賀・能登の国分寺についてであり、関係史料を左に摘記する。

和泉国言、以下在和泉郡一安楽寺^{（分願カ）}為^ニ国分寺、置^ニ講師一員・僧十口、但不^レ置^ニ読師、依^レ請許^レ之^{（『続日本後紀』承和六年五月癸未条）}

以^ニ加賀国勝興寺^{（分願カ）}為^ニ国分寺、准^ニ和泉国寺、只置^ニ講師一員・僧十口、其僧者便分^ニ割越前国々々分寺僧廿口之内^{（同右承和八年九月丁丑条）}

以^ニ能登国郡内定額大興寺^{（節カ）}始為^ニ国分寺^{（同右承和十年十二月乙卯朔条）}

能登国言、依^ニ去年十月十七日官符^{（節カ）}以^ニ定額寺^{（節カ）}為^ニ国分寺、訖、望請、停^ニ読師、被^レ給^ニ講師、勅、依^レ請許^レ之^{（同右承和十一年二月丙辰条）}

加賀国分寺置^ニ布薩戒本田二町^{（『文徳実録』斉衡二年五月癸亥条）}

勅^ニ能登国、置^ニ国分寺布薩戒本田三町^{（『三代実録』貞觀五年二月廿一日条）}

凡和泉国安楽寺・伊豆国山興寺・加賀国勝興寺・能登国大興寺、並各為^ニ国分寺、置^ニ僧十口、^{（『延喜式』）}壹岐島直氏寺為^ニ島分寺、置^ニ僧五口^{（『延喜式』）}

和泉・加賀・能登の各国分寺については、講師・住僧・布薩戒本田などを明記する点に着目した堀池春峰氏の指摘するごとく、奈良時代創建の国分寺が焼亡・倒壊等の理由で代替したものではなく、承和年間に旧存寺院の転用をもつて国分寺を新設したものであり、その承和年間における国分寺新設の歴史的背景は吉岡康暢氏が詳しく論じている。

私は堀池・吉岡両氏の意見に異をとえざる必要を認めず、したがって再論するに及ばないであろう。とくに吉岡氏の、国分寺新置まではそれぞれ部内の有力寺院（定額寺）が国分寺の機能を代行していたであろうが、分立後永らく（和泉・能登両国は八十余年、加賀国は十八年）放置してきた三国で、なぜ承和期に国分寺を新設したのかという疑問に對し、一般的な状況判断だと自らことわりつつ、以下のような提言をされていることは、まことに卓抜な所論である。すなわち氏は、国分寺の転用・新置を可能にした政治要因をいわゆる良吏による律令政治の刷新と関連させ、承和年間における慢性的な旱魃・飢疫がもたらした農村の荒廃と分解の進行を阻止するには勸農機能の回復と人心の動揺の鎮靜化が緊急を要する政策課題であって、承和年間に集中的にあらわれる国分寺対策は、こうした現実に即応した律令政治再建路線の延長上に位置づけられるが、しかし国分寺が律令制地方政治と一体的な公的機関として画一的に機能した最後の時期でもあったという。

私はこの吉岡氏の高説に基本的には賛同しながらも、なお前節で述べた国分寺修造と連関させて理解するなら、時期を承和年間に限定せず、弘仁・天長（嵯峨・淳和朝）から承和・嘉祥（仁明朝）にいたる時期の、律令国家が国分寺制維持に講じた諸施策全般で把握すべきであると考えている。こうした国分寺修造といい、国分寺代替・新設といい、それらは、〈伽藍〉の側面より觀察した国分寺制の変遷であって、つまるところ律令制の崩壊過程の段々の状況に對応した国分寺制振興の現実策と評価しうるが、たびたび説かれるような国分寺制衰退の劃期ないし要因の標示たりえないのである。それでは次に〈法会〉と〈僧尼〉の側面より觀察しなければならないが、節を改めることにしよう。

三 攘災招福の法会

国分寺における定例の法会は、奈良時代には毎月八日の最勝王経・金剛般若経の転読のほか、正月の最勝会・吉祥悔過、夏期の安居会が行なわれていたが、平安時代に入ると、延暦二十五年三月、崇道天皇（早良親王）のため、国

分寺僧をして春秋二仲月に七日ずつ金剛般若經を転読せしめる春秋読經が加わった。かかる定期の法会は、きわめて慣習的な形式主義に墮しがちで、その執行状況からは課題とする国分寺制の消長を捉えることは容易でない。しかし正史に散見するごとく国家は国分寺にさまざまな臨時の法会を行なわしめており、この臨時法会は、時期や動機ないし目的などがそれぞれ個別に明確であって、その執行状況から律令国家の国分寺に対する認識の様相を分析することは方法的に可能である。よって平安初期の国分寺制の推移を問題とする場合、同時代の国分寺における臨時法会の性向の検討は必要な作業であらう。

そこでいま延暦から嘉祥にいたるまでの国分寺臨時法会を正史より抽出したのが表Aである。この表を通覧して気づくのは、

- (一)、国分寺の臨時法会は、弘仁の末年から漸増し、承和年間に頻繁に行なわれている、
- (二)、その動機・目的は、地震・疫病・凶作・飢饉などの不祥を除去すること、すなわち攘災招福にある、
- (三)、法会は、昼は金剛般若經を転読し、夜は薬師悔過を修せしめる形式に固りつつある、

の三点である。(三)の依拠經典・修法儀軌のことはしばらく措くとして、(一)(二)は国分寺制にとって重大な、それでいてすこぶる微妙な問題を含んでいるのである。すなわち弘仁から承和にかけての異常気象による農業不振と飢饉・疫病の蔓延は、古代社会に深刻な影響を与え、律令体制を危機に陥れたが、緊迫した事態に対処すべき政策が実施に移されていくなかで、国分寺にて臨時法会が急増していることは、国土から一切の災障を消去し、安寧を祈願するいわゆる鎮護国家の機能が、この時期の国分寺に強く要請されていたことを意味している。そしてそれは同時に国分寺の歴史的性格を回想させたものと考えられるのである。

たとえば弘仁九年九月、地震と疫病の害を除去するため、天下諸国をして、齋を設け僧を屈し、金光明寺にて金剛般若經を転読すること五日ならしめたのは、「昔天平年、亦有_二斯變_一、因以疫病、宇内凋傷、前事不忘、取_レ鑑不_レ遠」

表A 国分寺における臨時法会

年・月・日	事 項	典拠
延暦元・12・4	太上天皇周忌斎に国分二寺僧尼をして誦経せしむ。	続紀
〃 8・12・29	中宮七七斎に国分二寺僧尼をして誦経せしむ。	〃
〃 24・2・19	天皇不予につき国分寺をして薬師悔過を修せしむ。	後紀
大同 3・5・10	飢疫を言上せし諸国の、今年の調を免じ、国分二寺をして7日間大乘を転読せしむ。	〃
〃 4・1・18	名神のために大般若経を写し、奉読供養して国分寺もしくは定額寺に置かしむ。	〃
弘仁 9・9・10	地震と疫病あるをもって天平年度の例に准じて諸国をして設斎し、金光明寺に5日間金剛般若経を転読せしむ。	類史
〃 13・8・1	災害頻発・年穀不登のため国分二寺にて7日間悔過せしむ。	〃
天長 7・4・26	大宰管内・陸奥・出羽等に疫病流行するをもって、諸国をして精進練行僧20人以上を選び、国分寺にて3日間金剛般若経を転読せしむ。	〃
〃 8・3・7	大宰管国の国分寺・定額寺に仏舎利を安置す。	紀略
承和元・4・6	疫病を防ぎ、豊稔を祈るため、諸国をして行者を選び、国分僧寺にて3日間金剛般若経を転読し、薬師悔過を修せしむ。	続後紀
〃 4・2・2	人主安穩のため諸国をして浄行僧7人を国分寺に請じ7日間十一面法を修せしむ。	〃
〃 4・6・21	疫病を防ぐため行者10～20人をして国分僧寺に3日間金剛般若経を転読し、薬師悔過を修せしむ。	〃
〃 6・閏1・23	疫病を防ぐため国分寺をして7日間般若を転読せしむ。	〃
〃 8・6・1	秋収に至るまで国司・講師、国分寺僧を率いて金剛般若経を転読せしむ。	〃
〃 9・3・15	疫病を防ぎ豊稔を祈るため、諸国の修行不退者20人を選び国分寺にて3日間金剛般若経を転読し、薬師悔過を修せしむ。	〃
〃 10・1・8	疫病等不祥をもって2月より9月までの毎月8日ごとに十五大寺・国分二寺・定額寺・名神等の寺に仁王般若経を講ぜしむ。	〃
嘉祥 2・2・25	疫病を防ぐため諸国をして名神に奉幣し、国分二寺・定額寺に7日間経王を転じ観音を礼せしむ。	〃

をよりどころとしたのである。また承和六年六月、国分寺の定期法会の一つである安居会において、僧寺での最勝王経講説、尼寺での法華経講説を必修ならしめた勅には、「国分二寺、建立自遠、一則名為金光明護国寺、一則号为法華滅罪寺、先帝救世利物之法、遠伝ニ不朽ニ者也」とあり、国分寺創建当初の理念に立ち返ることを強調している。弘仁・承和期と天平期とは、まったく同一の社会情勢ではなかったが、しかし飢饉・疫病という共通点があった。飢疫の流行こそが、攘災招福の祈禱をこととする国分寺の、天平期に果たした国土擁護（鎮護国家）の役割を、弘仁・承和期に再び発現せしめたものと想定される。

それはともあれ、こうした弘仁ないし承和年間の国分寺における護国法要の頻繁さは一見すると国分寺制の復興を指示するようである。だが関連史料を仔細にみれば必ずしもそうとはいえない側面をもっているのである。第一に、前掲表Aに列挙したとおり護国法要は国分寺で挙行されているが、なかには「簡ニ精進僧廿已上」（天長七年四月二十六日）「扱ニ国内行者」（承和元年四月六日）「請ニ淨行僧七口」（同四年二月二日）「行者廿口已下十口已上」（同四年六月二十一日）「簡ニ修行不退者二十人」（同九年三月十五日）とあるのが看過できない。国分寺僧が在住するにも拘らず、部内の修行者を国分寺に屈請して営ませているのである。この場合、国分寺は法要の施設を提供するにすぎない。第二に注意されるべきは、臨時の護国法要は国分寺だけではなく、国郡の官衙や部内諸寺においても行なわれていることである。延暦から嘉祥までの期間、特に国分寺と限定しないで諸国一斉に挙行された仏事を正史より抜きだしたのが表Bである。先に表Aで指摘した傾向が表Bでもあらわれるのは実に興味深く思う。すなわち飢疫等による攘災招福のための仏事は国分寺以外でも営まれ、これまた弘仁の末年から漸増し、承和年間が最も頻繁であった。国分寺における臨時の護国法要の頻度は、国分寺以外のそれを合せた全体の傾向のなかで理解されねばならない。

右の二点についてもう少し詳論しよう。国分寺法会に部内諸寺僧（民間修行僧）を屈請することは、奈良時代に先例があるものの、きわめて稀であった。平安時代になるとどうであろうか。前掲表Aでは天長七年四月以降の五例を

表B 諸国・諸寺等における臨時法会

年・月・日	事 項	典拠
延暦 8・12・23 〃 13・9・3 〃 24・1・14	中宮不予につき諸寺をして7日間大般若経を誦誦せしむ。 諸国をして3日間殺生を禁じ仁王経を講ぜしむ。 諸国をして国中の諸寺塔を修理せしむ。	統紀 類史 後紀 類史
大同 3・1・13 〃 3・3・1	疫癘の病苦を救うため諸大寺・諸国をして大般若経を奉読せしむ。 疫病につき諸国をして7日間仁王経を講ぜしむ。	〃
弘仁 9・4・22 〃 11・6・27	祈雨のため諸大寺・畿内諸寺等をして転経礼仏せしむ。 旱を救うため諸国をして大雲経を転読せしむ。	紀略 〃
天長元・4・28 〃 2・4・7	疫早を防ぐため十五大寺・諸国をして大般若経を奉読せしむ。 疫癘やまず阿蘇の神霊池涸渇する災異をもって、毎寺をして齋戒し仁祠を修せしむ。	類史 〃
〃 2・閏7・19 〃 8・3・25 〃 9・5・18	宮中・京・諸国に仁王経を講説す。 疫癘を防ぐため寺ごとに7日間般若経を奉読せしむ。 去年の不稔今年の疫・旱・火災等の災異につき諸国をして7日間経王を転読せしむ。	紀略 類史 〃
〃 10・6・8	諸国をして寺塔の修理を行なわしめ、また練行僧10～20人を請じ3日間金剛般若経を転読し薬師悔過を修せしむ。	統後紀
承和元・2・10 〃 3・7・16 〃 3・11・1 〃 5・4・7	万民安楽・五穀垂穎のため封戸・田園有る寺に最勝王経法を修せしむ。 疫癘間発につき諸国司に般若を転読し名神に奉幣せしむ。 転禍作福のため諸国の名神社ごとに法華経を読ましむ。 去年の年穀不稔・疫癘間発により十五大寺・諸国・大宰府をして7日間大般若経を読ましむ。	〃 〃 〃 〃
〃 5・5・3 〃 5・11・1	遣唐使の安全を祈るため諸国をして帰朝までの間、海竜王経を講じ大般若経を転読せしむ。 疫癘を防ぎ豊稔を祈るため諸国に般若心経を写さしめ、郡別に定額寺もしくは郡館に置き、練行僧を請じ法筵を開設せしむ。	〃 〃
〃 6・3・1 〃 7・6・13 〃 8・4・2	遣唐使船のために諸国をして大般若経・海竜王経を転読せしむ。 飢疫につき五畿内に命じ7日間大般若経を転じ薬師悔過を修せしむ。 風雨調適・年穀豊登のため、諸国の国司・講師ともに齋戒し、部内諸寺に金剛般若経を転読せしむ。	〃 〃 〃
嘉祥 3・1・27	疫癘を攘うため諸国をして灌頂経法を修せしむ。	〃

検出したが、ほかにも定期法会の場合でさえ一部それが行なわれていたようである。延暦二十五年三月に始まった金剛般若經の転読は、

宜_レ便国分僧春秋二仲月別七日存_レ心奉_レ読之經并僧教附_二朝集使言上_一、其布施者三宝調綿十屯、衆僧各調布一端、自今以後立_二為_二恒例_一、

という規定で営まれることになっていたが、『弘仁主稅式』には、

凡諸国春秋二仲月各一七日於_二金光明寺_一請_二部内衆僧_一、転_二読金剛般若經_一、其布施三宝綿十屯、僧各布一端、但供養用_二本寺物_一、若無_二国分寺_一及部内無_レ物寺者、並用_二正稅_一、

とある。当初は国分寺僧に転經させていたものを、弘仁式撰定の弘仁十一年以前には部内衆僧の屈請にあらためていた。「部内衆僧」には当然国分寺僧をふくむと考えられるが、とにかく国分寺の定期法会に勤仕する者のわくを同寺以外の諸寺僧にまで拡げたのである。神護景雲元年に始まった正月の吉祥悔過も『弘仁主稅式』に、

凡諸国自_二正月八日至_二二十四日_一、請_二部内諸寺僧於_二国分金光明寺_一、行_二吉祥悔過法_一、惣_二計七僧布施綿七匹・綿七屯・調布十四端、法服_二繩廿匹_一・綿十四屯、混合准_二価平等布施_一、並用_二正稅_一、但供養者各用_二本寺_一、若無_二国分寺_一及部内無_レ物者亦用_二正稅_一、

とあり、春秋読經と同じく「部内諸寺僧」を国分寺に屈請して修している。

こうした部内諸寺僧の国分寺法会への招聘は優れた人材を国分寺法会へ参加させることに意義があったと見られる。定期法要ではそれでもなお国分寺僧が幾分か主体性をたもっていたであろうが、臨時法要においては、

大宰管内及陸奥出羽等国、疫病流行、夭死稍多、令_二五畿七道諸国_一簡_二精進僧廿已上_一、各於_二国分寺_一、三箇日、転_二読金剛般若經_一、(『類聚国史』一七三、疾疫、天長七年四月己巳条)

防_二灾未萌_一、兼致_二豊稔_一、修善之力、職此之由、宜_レ令_二畿内七道諸国_一、択_二国内行者_一、於_二国分僧寺_一、三ヶ日内、

昼則転ニ金剛般若經、夜則修業師悔過、(『続日本後紀』承和元年四月丙戌条)

令ニ人王安穩、黎庶和樂、不レ如三十一面大悲者秘密神呪之力、宜下普告ニ五畿内七道諸国、請ニ淨行僧七口於国分寺、一七日夜、薰修十一面之法、(同承和四年二月乙未条)

疫癘間發、疾苦者衆、夫銷ニ殃未然、不レ如般若之力、宜令ニ五畿内七道諸国内行者、廿口已下十口已上、於ニ

国分僧寺、始レ自ニ七月八日、三箇日、昼読ニ金剛般若、夜修業師悔過、(同承和四年六月壬子条)

若非攘未然、恐班蒔失レ時、宜仰ニ五畿内七道諸国、簡ニ修行不退者二十人、於ニ国分寺、三ケ日間、昼読ニ金剛般若經、夜修業師悔過、(同承和九年三月庚戌条)

という一連の記事から察知するに、殊勝な呪験力をそなえた精進練行の清僧を簡択して国分寺へ請じているので、これらが主体の法要であったことがわかる。いったい国土と人心を荒廃させている飢饉や疫病を、科学と政治とではなく、宗教によって消殄させようと図った古代の律令国家が、国分寺の定期法会ではもはや間に合わない程の深刻な事態を緊急に回避すべく、あえて臨時法要を営ませたのであるから、それだけに呪験の速効が期待された。呪力にすぐれた修行者が屈請されてしかるべきであった。

しかしながら、彼らが如法に祈修できうればそれでよく、そのための施設は国分寺にかぎる必要は何らない。国分寺以外の場所で護国法会が執行されても不思議ではなからう。

諸国疫癘、天亡者衆、自レ非修善、何以攘災、宜令ニ諸国、各請ニ練行僧、大国廿人、上国十七人、中国十四人、下国十人、三ケ日内、昼転ニ金剛般若經、夜修業師悔過、其布施者三宝穀十斛、僧三斛、以ニ正税ニ充行、俾レ致ニ精進、(『続日本後紀』天長十年六月癸亥条)

これは、前掲した国分寺における清僧屈請の法会とほとんど類似の記事で、杜撰にも「於国分寺」が脱漏しているか

に思えるが、法会の場合を国分寺とする決め手はない。表Bにあげた臨時法会のうち、たとえば「令_下十五大寺并五畿内七道諸国_一、奉_レ誦大般若經_一、防_二疫旱_一也」のとき記事の場合、諸国ではどこで執行したか、判然としない。おそらく実際には国司がその都度、適宜に法会の場合を設定したのであろう。国分寺か、それとも同寺以外の所か、多分に両方が考えられる。

それでは地方で護国法要を国分寺以外に営むとすればどこがあろうか。思い付くのは定額寺（部内諸寺）や官衙である。承和五年十一月の勅_⑤を引いて参酌しよう。

勅、廼者妖祥屢見、氛祲不_レ息、思_二民与_レ歲、忘_二寢与_レ食、其_下黎庶無_二疾疫之憂_一、農功有_二豐稔之喜_一、不_レ如_二般若妙詮之力、大乘不二之德_一、普告_二京畿七道_一、令_レ書_二享供_二養般若心經_一、仍須_二国郡司并百姓、人別俾_レ出_二一文錢若一合米_一、郡別於_二一定額寺若郡館_一收_二置之_一、国司講師惣加_二檢校_一、所_レ出之物、分爲_二二分_一、一分充_二享經料_一、一分充_二供養料_一、其米來年二月十五日各於_二本处_一、屈_下請精進練行堪_二演說_一者_一、開_二設法筵_一、受持供養、当_レ会前後并三ケ日内、禁_二斷殺生_一、公家所_レ捨之物、每_二二会处_一、以_二正稅稻一百束_一充_レ之、庶使_下普天之下、旁薰_二勝業_一、率土之民、共登_二仁寿_一、

諸国の官人百姓をして一文錢・一合米を醸せしめ、般若心經を書写してこれを郡ごとに定額寺もしくは郡館に置き、精進練行のものを屈請し供養せよというのである。また承和八年四月には、「紫宸増_二宝算之長_一、赤帛絶_二天折之患_一、兼復風雨調適、年穀豐登」ならしめんがため、「宜_下仰_二五畿内七道諸国_一、令_二国司講師相共齋戒_一、於_二部内諸寺_一、転_二読金剛般若經_一」ている。諸国の護国法要は、こうした部内の定額寺（諸寺）に営ませる事例が現われた。しかしてその一方で依然と国分寺にても行なっているから、承和十年正月の、「疫癘間発、夭死者衆」く、しかも狂花ひらく不祥をはらうため「宜_下始_レ自_二來二月迄_一于九月、每_二八日_一令_下十五大寺及七道諸国国分二寺并定額寺名神等寺_一、講_中仁王般若經_一、および嘉祥二年二月の、今年は疫癘しげく、また洪水あるべしという陰陽寮の上言をもって、「宜_レ

令_レ五畿内七道諸国一奉_二幣名神_一、兼復於_二国分二寺及定額寺_一、一七箇日、昼_レ転_二經王_一、夜_レ礼_二觀音_一、^⑧のように、国分寺と定額寺での並修も見られるに至った。

私は前々節において、弘仁ないし承和・嘉祥のころ、定額寺の修造に国司・講師を関与せしめたことは律令国家が定額寺を国分寺に次ぐ存在であると認識したことを意味していると述べたが、まさしく護国法要においてもそのことが立証されるのである。国分寺ならびに定額寺の僧に修行を督励した仁寿三年（八五三）六月の官符に、

先帝創_二建国分二寺_一、分号_二護国滅罪之寺_一、（中略）又於_二定額寺_一、雖_二建立有_レ主本願異_レ趣、而擁_二護國家_一、豈為_二分別_一、此皆救世利物、伝_二于今_一不朽者也、

と明記し、定額寺が国分寺とその建立の本願を異にすることを認めつつ、鎮護國家においては国分寺を補完するもの、ないしは国分寺と同等の機能を有するものとみなしている。このように、攘災招福の護国法要が国分寺のみならず定額寺において並修されるのは、一には律令國家の地方寺院政策が国分寺主義から国分寺・定額寺主義に転換されることを示し、二には従って国分寺の地方仏教に占める位置が相対的に低下しだすことを示すのである。

次に官衙における法会はどうであろうか。郡館における臨時の法会は一前引の承和五年十一月勅に一例を見い出すが、国庁におけるそれは実証しえない。だが、より重大な意義をもつ定期の法会が承和年間に二つも創設されているのである。承和六年九月の勅に、

勅、如聞、所_レ以神護景雲二年以還、令_二諸国国分寺_一、每年起_二正月八日_一至_二于十四日_一、奉_レ読_二最勝王經_一、并修_二吉祥悔過_一者、為_二消_二除不祥_一、保_二安國家_一也、而今講読師等、不_二必其人_一、僧尼懈怠、周旋乖_二法_一、国司檢校、亦不_二存_二心_一、徒有_二修福之名_一、都無_二殊勝之利_一、此則縑素異_レ處、不_二相監察_一之所_レ致也、宜_レ停_二行_二国分寺_一、而於_二片事_一修_二之_一、自今以後、立_二為_二恒例_一、

とある。^⑨従来、国分寺にて最勝王經転読と併修していた吉祥悔過を国庁にて修せよという。承和十年に「山城国正月

吉祥悔過、自弘仁十三年、依官符旨、於国庁修焉、始自是歲、復旧例、令修於国分寺^⑤。たという例外もあるが、『延喜玄蕃寮式』に、

凡諸国起正月八日迄三十四日、請部内諸寺僧於国庁、修吉祥悔過、国分寺僧專読最勝王經、不預此法、惣計七僧法服并布施料物、混合准^レ価、平等布施、並用正税、並見主税式、其供養亦用正税、

と規定しているので、全国一齊に変更になったものと考えられる。前記したごとく弘仁式の段階では部内諸寺僧（国分寺僧を含むか）を国分寺に屈請して修した吉祥悔過は、延喜式の分註に「国分寺僧專読最勝王經、不預此法」とあつて、ここにまったく国分寺と無関係の法要となつた。この法会は「毎年正月修吉祥悔過者、為祈年穀攘災難也^⑥」といわれ、きわめて護国性が濃く、国分寺の定期法会より外れたことは、攘災招福の祈禱を主務とする国分寺が果たす鎮護国家の一角を喪失したことにならう。

方広悔過に由来する仏名懺悔（仏名会）は承和五年より内裏の清涼殿で修することが恒例となり、さらに承和十三年十月諸国へ及ぼされた。その国史収録の勅文は、

仰三五畿七道諸国、限以三ヶ日、令修仏名懺悔事、其布施者、三宝穀七斛、衆僧各六斛、供養准例、並用正税、自今以後、立為恒式、

と、国史に通弊の要領をえない記し方である。これと同内容の格によると、

諸国須、毎年自十二月十五日迄三十七日三箇日夜、別於庁事、灑掃粧嚴、屈部内名徳七僧、礼懺仏名大乘、とあつて、十二月十五日（仁寿三年に十九日と改める）より三箇日夜、部内の名僧を国庁に屈請して営んだことが判明する。仏名懺悔の法は、国内の年中所作の罪過を悔い改める「滅惡興善^⑦」のために営む法会だが、思想的には容易に攘災招福に通じ、また歳首の吉祥悔過と呼応して、両者の法会が神祇令の十二月大祓と祈年祭のごとき關係に相当するものなれば、自ら護国性ゆたかな法会であつたであらうと想像される。このような仏名会を吉祥悔過と同じく国

分寺に関係なく開筵したことは、結果的には諸種の護国法要を執行する宗教施設たるに存在意義をもつ国分寺を輕しめていったのではないか。

以上、冗漫な叙述になったが、本節の要する趣旨は次のとおりである。弘仁から承和に至る八世紀前半は、不斷に続く氣候不順がもたらせた凶作と、それがために起る飢饉と疫病の流行で国土は荒廃し、人民は疲弊していた。このような国土を擁護し、人心を收攬するために、創建当初より鎮護国家を標榜する国分寺において、盛んに攘災招福の法会が行なわれ、活況を呈したのである。まさに国分寺制の理念がここに再顯したかに見えた。しかしながらその反面、国分寺で営む護国法要に部内諸寺僧の参加が始まり、精進練行にして呪驗力をもつ清僧・名僧を簡選し、国分寺へ屈請して特別法要を執行することも次第にふえ、また国分寺の独擅場であった護国法要そのものが部内の定額寺でも並修され、定額寺が鎮護国家の機能の一部を担うようになり、いっそう決定的なことには、国分寺の定例法会であった吉祥悔過が国庁にて修するに改められて国分寺と無関係の法会に変じ、国分寺は鎮護国家の主務の一角を失なうという実情を考慮するとき、国分寺の地方仏教に占める位置の相対的低下や、鎮護国家に果たす役割の相対的輕減を認めざるを得ないのである。

このように弘仁ないし承和の時期は国分寺制にとって復興と衰退のきざしが同時に進行した、いわば一つの劃期であった。私は、あえて言うなら、国分寺制の消長のメルクマールは護国法要の執行情況にあると考えている。

四 国分寺僧尼の資質

さて、国分寺が鎮護国家の機能を鈍化させた原因は何であったのだろうか。それは一口にいつて国分寺僧の資質と素行の劣悪にある。この国分寺僧の素質低下をもって国分寺制衰退の一因とする先学^⑧の指摘は正鵠をえた見解であり、ここに再論するに及ばないと思うが、私なりに一応整理しておきたい。

三善清行は意見封事のなかで、

朝家毎年正月、始_レ自_二大極殿前_一、至于七道諸国、修吉祥悔過、又聖代毎年修仁王会、遍為百姓、祈禱豐年、消伏疾疫、(中略)然猶所_二以水旱不_レ休災殄屢發_一者何也、僧徒修_レ之者多非其人_一也、

と述べ、護国法要に靈驗を得ないのは、修法者が適材でないからだと看破している。これは清行のみならず律令国家の貴族官人に共有の認識であつたと考えられる。彼はさらに、諸国において管内の「法務」をつかさどるべき講読師は「多非持律之人、或有贖勞之輩」、国分寺僧にいたつては「皆是無漸之徒也、蓄妻子、營室家、力耕田、行商、働こ」というありさまだから、国司が例によつて祈念せしめ、その感応を望むことは「譬猶縁木求魚、向鼃採花也」とまで極言している。右の清行の意見は、簡略というなら、国分寺の護国法要の成否はひとえに同寺僧の資質いかんに係っているということで、これは正論といわざるをえない。

前にも引用した仁寿三年六月の官符はいう。

国分之僧、還多放逸、福田荒而不耕、農畝競而訟利、鐘磬絶響、六時無聽、香火止煙、三業弥倍、護国減罪之理、不可焉然、

国分寺僧が放逸に流れ、修行を怠り、それゆゑ護国の理念を没却していたことは動かしがたい事実であつた。それではなぜ国分寺僧がこのような悪質な情態に陥つたのか。私は、当時の「僧徒濫惡」という一般論では律しえないものがあつたと考える。つまり国分寺僧の補任に制度的な問題が存したのである。

奈良時代の沿革はさておき、国分寺僧に欠員が生じた場合、「国司国師共簡定申官、待報符行」とする規定であつたが、延暦二年四月の官符によると、最近ではこれを悪用してか、「国司等不精試練、每有死闕妄令得度」なる弊害を生じたので、今後は死闕の替りについて、新度をみとめず、当土僧の中より補任することに改革した。ところがこの後まもなく延暦二年の当土僧補任の格を停め、京寺僧で情願するものを簡択して国分寺僧の欠をうめる規

定にかえた。^⑧しかし、京寺の僧は都を去ることを嫌い、心願者はきわめて少なく、そのため国分寺の法会は、まゝ僧員が備わらず、まともに執行できないありさまであった。^⑨そこで弘仁七年五月、京寺僧の国分寺赴任の便宜をはかるべく、路次に食馬を給与する措置が講じられ、^⑩また弘仁十二年十二月、京寺僧の心願者の外に、「宜_レ扨_二当国百姓、年紀六十以上、心行既定、始終無_レ変者_一度_レ之、即補_二当国々分僧之闕焉_一」こととなった。国分寺僧の死闕の替りを補任する方法は、新度を認めず当土僧を採る方法から、京寺僧の心願者を簡括する方法へ、そして京寺僧の心願者で不足の場合に六十歳以上の当国百姓を新度する方法と、わずか四十年間に三転したのである。

これらの施策には国分寺僧の資質向上への努力が窺われるものの、反面では諸大寺官僧の国分寺輕視を察知しえて興味深く思う。また、当土人の新度を復活したことは、国分寺僧の定員制維持のための員数合せという律令体制の形式主義の現われにはかならず、抜本的な解決策ではなかった。案の定、天長五年二月、大宰府観世音寺の講師・光豊が、国分寺僧に六十歳以上の人を得度させることは、老い先みじかい高齢者が仏道に入り、勤学修行しても何の益にもならず、法会に奉仕しても儀式に慣れないから、会集者に嘲笑されるありさまだと指弾し、国分寺僧二十人のうち五人だけは二十五歳以上の壮年者を得度させることに改めるよう牒し、勅許された。^⑪そして結局は『延喜玄蕃式』の、凡諸国国分寺僧、有_二死闕者_一、簡_二擢京諸寺僧堪_レ為_二法師_一者_上申_レ官、省申_レ官補_レ之、諸寺僧無_二心願者_一、扨_二百姓年六十已上者_一新度補_レ之、但寺別令_レ有_二壮年者五人_一、若見僧心願之内、壮年満_二此数_一、不_レ聴_二更新度_一、其尼者講師与_二国司_一簡定、申_レ官度_レ之、

という規定に落ちつく。^⑫国分寺僧の補任は、条文では京寺僧の簡擢を主とし、当国百姓の新度を従とする規定だが、実際は逆か、もしくは新度ばかりであったと想像される。すなわち年齢の老荘を問わず、当土人の新度を許したところ、国分寺僧の資質低下を招く要因がひそんでいたのである。得度の実権をにぎる国等司の不正もさることながら、中央における年分度者のごとき一定水準の課試をもって資質の保持につとめた形跡がないからである。

国司と共に部内の仏教行政をつかさどる講読師は中央から派遣されて赴任し、解由をもって交替したのに対し、同じく地方諸国で鎮護国家になる国分寺の住僧の大部分が土人であった。大寺と並んで国家仏教をささえる官寺体制の一翼たるべきはずの国分寺が、ひっきりや律令体制の中央・地方の構造的格差の中に位置づけられてしまったことを見過ごしてはならない。

おわりに

以上、本論で陳述したことを要約すると、次のようになる。光仁・桓武・平城の各朝は国分寺維持対策に消極的な態度であった。したがって自然と頽壞の傾向にあった所を、嵯峨朝になるや国分寺修造を督励しだした。その修造の責任は国司・講師の僧俗両官に課せられた。これは前代に比べて国分寺重視の現われだと評価できる。しかし、国司・講師の関知する寺院修造が国分寺以外の定額寺に及んでいることは看過できない。律令国家が定額寺を国分寺に次ぐ存在と認識しだしたことを意味していよう。

また、国分寺罹災と代替寺院について、関連史料をつぶさに検討したところ、国分寺の代替には国府から近距離にあった、御願を修するにふさわしい壮麗な寺院があてられたこと、その代替はほんらい再建までの便宜的な措置であったと見なされること、九世紀末葉の元慶年間にあってもなお旧国分寺の再建を図っていることなどが判明した。そこで国分寺代替は、律令諸制度の弛緩と国衙財政の窮乏という情況下でとられた国分寺維持のための現実的施策であったと考える。それに承和年間の能登国等の国分寺新設は、弘仁・天長から承和・嘉祥にいたる時期の、国家が国分寺維持に講じた政策全般の中でその意義を把握すべきだと思う。

次に弘仁から承和にかけて、不断に続く飢疫の流行を消殄させるため、鎮護国家を使命とする国分寺にて頻繁に攘災招福の法会が行なわれ、国分寺制の理念が再現したかに思えた。が、その反面、国分寺法会に部内諸寺僧が参加し、

あるいは国内の清僧・名僧を屈請して特別の護国法要が営まれることも次第に増え、鎮護国家の仏事は国分寺のほか
に定額寺でも並修され、それに加えて吉祥悔過と仏名懺悔が国庁で催されるようになった。かかる趨勢の下、国分寺
がほんらい有し、かつ標榜してきた鎮護国家の役割は、相対的に軽減して行ったのである。私は国分寺制の消長のメ
ルクマールをこのような護国法要の執行情況におきたい。

ところで国分寺が鎮護国家の機能を鈍化させた原因は、ほかならぬ国分寺僧の資質低下にあった。国分寺の護国法
要の成否はひとえに同寺僧の資質いかに係っているが、実際、国分寺僧の素行は悪く、修法にたえなかった。資質
の低下を招いたのは国分寺僧の補任方法に問題があったからだと思われる。そもそも国分寺は僧尼の定員制をとり、
欠員が生じた時のみ補充したのである。平安初期に三たび変遷があつて、結局、補充方法は京寺僧の簡括と当国百姓
の新度の両様だが、実際は後者の場合が多く、当土人の新度には年分度者のごとき課試をしなかったために資質の向
上は困難であつたと推測される。

註

① 国分寺遺跡の発掘調査の結果は、それを実施した機関等

が公刊する発掘調査報告書や担当者が寄稿する考古学関係

の研究誌などに詳しい。奈良国立文化財研究所埋蔵文化財

センター編『国分寺等発掘調査関係文献目録』（『埋蔵文化

財ニュース』二二）はこれら報告書等の文献目録である。

また坪井清足氏の編する「近年発掘調査された諸国の国分
寺」（『仏教芸術』七一、一〇三）は概略を知るのに至便で

ある。

② 井上薫「郡寺と国分寺」（坂本太郎博士還暦記念会編

『日本古代史論集』上巻所収）。

③ 八賀晋「国分寺建立における諸様相」（弥永貞三先生還
暦記念会編『日本古代の社会と経済』下巻所収）。

④ 魚澄惣五郎「国分寺の衰頹」（角田文衛編『国分寺の研
究』上巻所収）。

⑤ 堀池春峰「国分寺の歴史」（『仏教芸術』一〇三）。

⑥ 吉岡康鴨「承和期における転用国分寺について」（下出
濱與博士還暦記念会編『日本における国家と宗教』所収）。

⑦ 前掲堀池春峰論文。なお辻善之助「国分寺考」（『日本仏
教史之研究』所収）は宝龜の初年とし、角田文衛「国分寺
の設置」（同編『国分寺の研究』上巻所収）は宝龜年間と

する。

⑧⑨ 『類聚三代格』卷三、国分寺事。

⑩ 天平十三年二月十四日勅に「国司等各宜、務存嚴飾」兼
「尽潔清」と（『類聚三代格』卷三）、同十六年十月十七日勅
に「国師親臨檢校、務令阜成、用粮物子細勘録、以申綱
所」（同書弘仁三年三月廿日太政官符所引）、同十九年十
一月己卯詔に「国司宜与_三使及国師一簡_二定勝地_一勤加_二營
繕_一」（『統日本紀』）とある。

⑪ 『統日本紀』天平神護二年九月戊午条。

⑫ 『日本後紀』序。

⑬ 『統日本後紀』序。

⑭ 『大日本古文書』二一巻二八二頁。

⑮ 大塚徳郎『平安初期政治史研究』第一章第三節。

⑯ 『類聚三代格』巻一二、弘仁四年九月廿三日太政官符。

⑰ 『類聚三代格』巻三、延暦廿四年十二月廿五日太政官符
所引延暦十四年八月十三日太政官符。同書延暦十五年三月

廿五日太政官符で「諸国定額寺資財者、国司与_三綱檀越_一
共檢校処分、其任_三綱_二者、依_二檀越衆僧請_一、国司覆勘充
任」と、定額寺資財の檢校、三綱の補任に講師の関与を排
しているのは、これにもとづく措置である。

⑱ 『類聚国史』巻一八六、僧尼雜制。

⑲ 『日本後紀』延暦十八年五月壬戌条。

⑳ 註⑫延暦廿四年十二月廿五日太政官符。

㉑ 『貞観交替式』。

㉒ 『類聚三代格』巻三、国分寺事。

㉓ 拙稿「定額寺私考」（笠原一男博士還暦記念会編『日本
宗教史論集』上巻所収）にて、定額寺を、国家により存立
の認証を得たる諸寺院のことであると規定、それが寺格の
意義を帯びるのは延暦二年の私寺建立禁止より以後のこと
と推考し、格式に見える「諸寺」としばしば同義に解され
ると述べた。

㉔ 『類聚三代格』巻三、延暦廿四年正月三日太政官符、大
同元年八月廿二日太政官符、同年同月廿七日太政官符。

㉕ 『貞観交替式』嘉祥二年閏十二月五日太政官符所引。

㉖ 『類聚三代格』巻三、貞観十年六月廿八日太政官符。

㉗ 『統日本後紀』承和五年九月甲戌条。

㉘ 『統日本後紀』承和八年五月己丑条。

㉙ 註㉕嘉祥二年閏十二月五日太政官符。

㉚ 『政事要略』巻五五、天慶二年二月十五日太政官符。

㉛ 『類聚三代格』巻三、天平宝字三年六月廿二日乾政官符

「修治諸寺破壞_二事_一」には山階寺玄基法師の奏状をもって
「仰_三国司檀越等_二毎年漸治_一」とあり、諸寺の修造に国司を
関与させたかに見えるが、これは『統日本紀』同年六月丙
辰条によれば、五月九日の勅を奉じて上表した意見封事の
一つで、「其緇侶意見、略抛_二漢風_一、施_二於我俗_一、事多不_レ
穩、雖_レ下_三官符_一、不行_二於世_一と、実現しなかったよう
である。

㉜ 前掲魚澄愍五郎・堀池春峰・吉岡康暢各論文、宇佐美正
利「定額寺の成立と変質」（下出積與編『日本史における

民衆と宗教』所収、舟ヶ崎正孝『日本庶民宗教史の研究』六六～六七頁など。

③ 速水侑「定額寺の研究」(『北大史学』六号)四頁。

③④ 前掲宇佐美正利論文九四頁。「また国分寺の機能も早くから衰退していた」(傍点中井)というのは、文脈から推せば延暦年間以前のことを指示するようである。たとえ言葉のニュアンスの相違を考慮しても、言いすぎの感があり、この部分は私にはとうてい承服しがたい見解である。

③⑤ 『大日本古文書』六卷六〇四頁。『平安遺文』第四二八・一・四二八四号文書。

③⑥ 『伝教大師全集』五卷附録三頁。

③⑦ 『類聚国史』卷一八七、度者、延暦十一年正月庚午条。

③⑧ 『伝教大師全集』一卷二八四・二九三頁。

③⑨ 『伝教大師全集』一卷六二七頁。

④⑩ 橋川正「近江国分寺考」(同著『日本仏教文化史の研究』所収)、柴田実「近江国分寺」(角田文衛編『国分寺の研究』上巻所収)。両氏とも『日本後紀』延暦十八年七月是月条の、三河国に漂着した天竺人を川原寺に住ませ、後に「近江国々分寺」へ遷したとある記事の国分寺は、国昌寺のことだといふ。

④⑪ 『沙弥十戒威儀経疏』跋文(『日本太蔵経』小乗律章疏一、一五九頁)。

④⑫ 『三代実録』仁和三年六月五日条。

④⑬ 『続左丞抄』第一、天曆二年十二月廿八日太政官符。

④⑭ 『日本後紀』大同四年閏二月辛丑条の「始遷志摩国国分二寺僧尼」安置伊勢国国分寺」は、志摩の国分二寺が何かの災害に遇うて僧尼の居住に耐えられなくなり、同国内に代替条件を満たす寺院が存在しなかったたので、やむなく隣国の国分寺へ移住させたものと解しておく。

④⑮ 西口順子「梵釈寺と等定」(『史窓』三六号)。西口氏は『続日本紀』延暦五年正月壬子条の「於近江国滋賀郡始造梵釈寺」を、この時点で主たる堂舎が一応あったと解しているが、この記事は造営の開始を示している。

④⑯ 『類聚三代格』卷一五、延暦十四年九月十五日勅。

④⑰ 試みに延暦年間の近江国役夫の徵発記事を摘記すると、(1)『続日本紀』延暦八年十二月丙申条「差発左右京・五畿内・近江・丹波等国役夫」(皇太后葬儀ノタメ)。

(2)『同書』延暦九年閏三月丁丑条「差発左右京・五畿内・近江・丹波等国役夫」(皇后葬儀ノタメ)。

(3)『日本後紀』延暦十八年十二月丁丑条「発伊賀・伊勢・尾張・近江・美濃・若狭・丹波・但馬・播磨・備前・紀伊等国役夫、以充造宮」。

(4)『日本紀略』延暦十九年十月己巳条「発山城・大和・河内・摂津・近江・丹波等諸国民一万人、以修葛野川隄」。

(5)『日本後紀』大同元年三月壬午条「発左右京・五畿内・近江・丹波等国夫五千人」(桓武天皇葬儀ノタメ)の五例を数える。『日本後紀』の欠逸部分に徵発記事がある。

った可能性は高く、そうすると、右例数は増えよう。

④⑧ 『続日本後紀』承和十二年三月己巳条。

④⑨ 佐伯有清「神火と国分寺の焼失」(同著「新撰姓氏録の研究」〈研究篇〉所収)。

⑤① 元慶三年二月二十二日に「紀伊国金光明寺火、堂塔房舎悉成灰燼」と、紀伊の国分僧寺は全焼したが(『三代実録』)、やがて再建されており(伊藤只人「紀伊国分寺」『角田文衛編『国分寺の研究』下巻所収)、笠井保夫「紀伊国分寺」『仏教芸術』一〇三二)、後者のケースを想定しうる。

⑤① この定額寺は『文徳実録』斉衡二年九月甲戌条に「以伊豆国大興寺、預於定額、為海印寺別院、大興寺者、孝子文部富賀満為国家所建也」とある大興寺を指すという説があるが(大場磐雄「伊豆国分寺」『角田文衛編『国分寺の研究』上巻所収)、確証はない。

⑤② 註⑤①参照。

⑤③ 『三代実録』元慶八年八月廿六日条。

⑤④ 尾張国分寺跡の発掘調査を担当した浅野清氏は、元慶の火災以後に国分寺(旧金光明寺)の堂塔の再建は断念されたと考える方が妥当であるといい、文献資料を検討した水野柳太郎氏は、国分寺は愛智郡の願興寺から更に国分尼寺が転用されていたことを想定している(『稲沢市史』後編各論「二 尾張国分寺の発掘調査」)。

⑤⑤ 前掲魚澄惣五郎論文三三二〇頁。

⑤⑥ 前掲堀池春峰論文。

⑤⑦ 前掲吉岡康暢論文。

⑤⑧ 『日本後紀』大同四年正月乙未条の「令天下諸国為三明神・享大般若經一部、奉読供養、安置置国分寺、若无国分寺者、於定額寺」がその徴証である。

⑤⑨ 和泉・能登国とは同じ併合・分立の過程をたどった佐渡・安房国のうち、佐渡国分寺は『続日本紀』神護景雲二年三月乙巳条によってその存在が確認される。安房国分寺の文献的初出は、同国講師を補す仁和二年六月廿二日太政官符で、「彼国定国分寺已置三十僧、至修御願請部内僧以為講師」とある(『類聚三代格』卷三)。仁和二年まで講師が赴任駐在しなかった。が、国分寺の設置は、明証を欠くけれども、承和年間もしくはそれ以前に遡ると考えられる。なお『延喜玄蕃式』に見える伊豆山興寺・宍岐島直氏寺は、奈良時代創建の国分寺の代替寺院と想定しておく。

⑥① 国分寺における法要の沿革については、角田文衛「国分寺の寺院組織」(同編『国分寺の研究』所収)が詳しい。

⑥② 前掲堀池春峰論文。

⑥③ 『類聚国史』卷一一、祈禱上。

⑥④ 『続日本後紀』承和六年六月丁丑条。

⑥⑤ 称徳天皇の七七日斎は、『続日本紀』宝龜元年九月辛巳条に「七七、於山階寺設齋焉、諸国者、毎国屈諸管内僧尼於金光法華二寺行道転経」とあるが、次の光仁天

皇、皇太夫人高野新笠の七七日齋は国分二寺の僧尼に誦經させている(表A)。

⑥5 『類聚三代格』卷三、延暦廿五年三月十七日太政官符。

⑥6 『日本紀略』天長元年四月丁未条。

⑥7 したがって表Bに掲示の臨時法会の中には、国分寺で行なわれた可能性のあるものを含んでいる。

⑥8 『続日本後紀』承和五年十一月辛酉条。

⑥9 『続日本後紀』承和八年四月壬寅条。

⑦0 『続日本後紀』承和十年正月丁酉条。

⑦1 『続日本後紀』嘉祥二年二月庚戌条。

⑦2 この後、護国法要の国分寺・定額寺並修は、『三代実録』の貞観三年八月十七日条、七年正月四日条、同二月十日条、十五年二月廿三日、十七年十二月十三日条などに見える。

⑦3 『類聚三代格』卷三、仁寿三年六月廿五日太政官符。

⑦4 『続日本後紀』承和六年九月己亥条。

⑦5 『続日本後紀』承和十年十二月庚午条。

⑦6 『類聚三代格』卷二、昌泰元年十二月九日太政官符。

⑦7 『続日本後紀』承和十三年十月乙未条。

⑦8 『類聚三代格』卷二、承和十三年十月廿七日太政官符。

⑦9 『類聚三代格』卷二、仁寿三年十一月十三日太政官符。

⑧0 註②に同じ。

⑧1 魚澄惣五郎・堀池春峰各前掲論文。

⑧2 『本朝文粹』二、意見十二箇条。

⑧3 『類聚三代格』卷三、天平神護二年八月十八日太政官符。

ただこの規定は「先度之尼十人」中の死關についてであるが、国分寺僧二十人中の死關も同規定であったと考えてよい。

⑧5 『類聚三代格』卷三、延暦二年四月廿八日太政官符。

⑧6 『延喜玄蕃式』に「凡僧綱、毎歳首遍訪求諸大寺僧情願、国分寺僧二者、不論多少、細記三年、願并願国、正月卅日以前経三省寮ニ申シ宜、若申ニ国分寺僧死關、即便補之」という細則がある。

⑧7 『類聚三代格』卷三、弘仁十二年十二月廿六日太政官符。

⑧8 『類聚三代格』卷三、弘仁七年五月三日太政官符。

⑧9 『類聚国史』卷一八七、度者。

⑨0 吉岡康暢前掲論文。ただし吉岡氏は、当土僧の実態を「当国百姓」と表記するに至ったことが注目されるとし、宝亀・延暦年間の私度僧取締りの実質上の解禁とみなければなるまいと述べるが、得度制度に関する概念に誤解があるようで、再考を要する。

⑨1 『類聚三代格』卷三、天長五年二月廿八日太政官符。

⑨2 国分寺僧に度すべき百姓の年齢制限について、国史大系は「十六已上」とし、宮城栄昌氏は『延喜式の研究』(史料篇)四七四頁にてそれを支持するが、『政事要略』卷五五などに随って「六十已上」とする方が正しい。というのは、弘仁十二年十二月の格はなお有効であること、六十歳以上としなければ天長五年二月格を承けた「寺別令」有壯年者五人」の語が理解しがたいことである。